水かけ

303
26

始

小う巻

363
26

歌と書と源は一つてある。一つを耳に聞える響とすれば、他は目に見える流てあらう。響の緩うして流の豊かなのもいゝ。響の高うして流の濁つたのもおもしろい。響の強うして流の怒つたのも悪くない。しかし、私は響の爽やかなのと流の清いのとを望むものてある。それが低くてもいゝ、透れば滿足する。細くてもかまはない、澄めば本懐てある。私の歌の聲は低く且細い。書もまたそれに伴つてゐる、がまだ透らない、その上に澄んてゐない。これが私の人に恥づる處てある。

昭和十一年三月

尾上柴舟

一　山の霧凝りて作れる朝露の草生の冷は靴に透るも

二　堰塞越す水の冷たくなりぬらし菜洗ふ音のしみじみ聞ゆ

三　立ち迷ふさ霧の上に現はれて遙かなるかな山の嶺

四　降らむとし僅に保つ空の下に咲き滿つ梅の花は寂しも

五　大空の色も深さも變らねばまたわが涙落つるなりけり

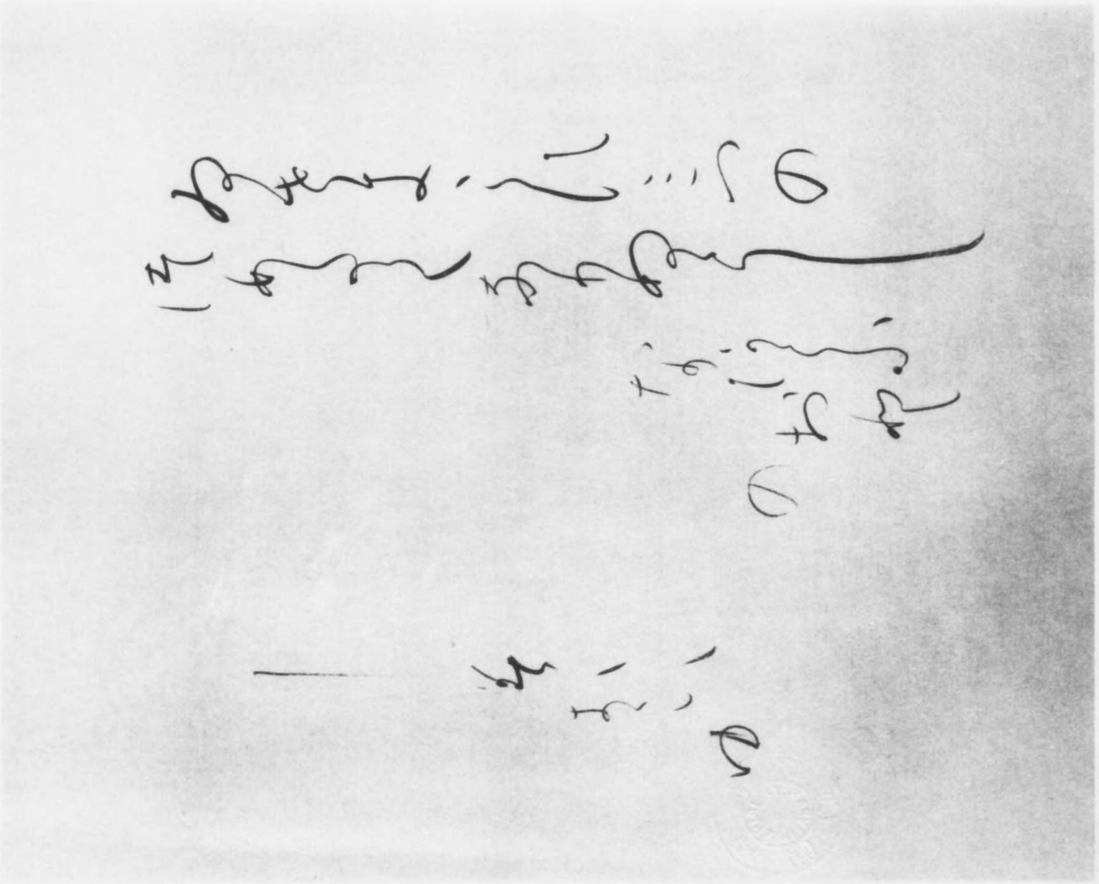
六　細細と鳥のあとこそ續きたれ川原の砂の夕べ白きに

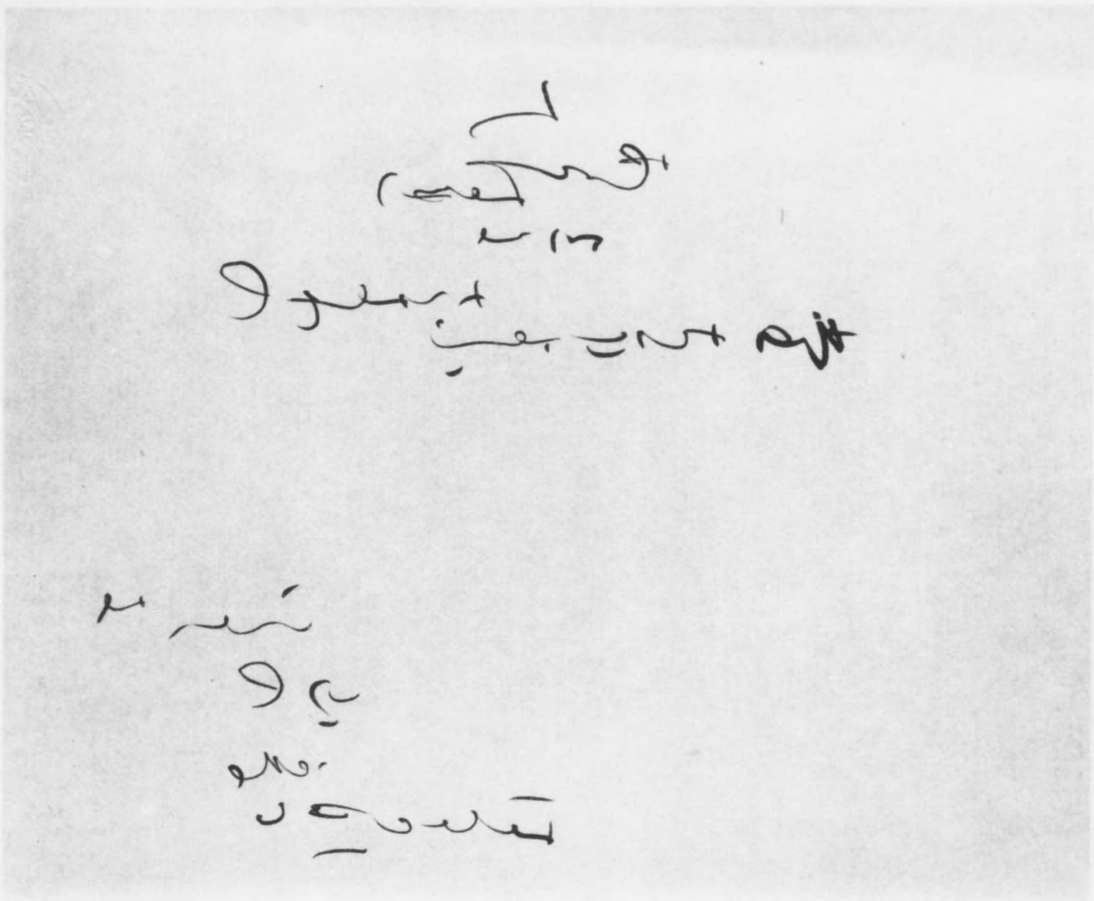
七　東山續く峯峯ほの黒き上に夜中の月一つあり

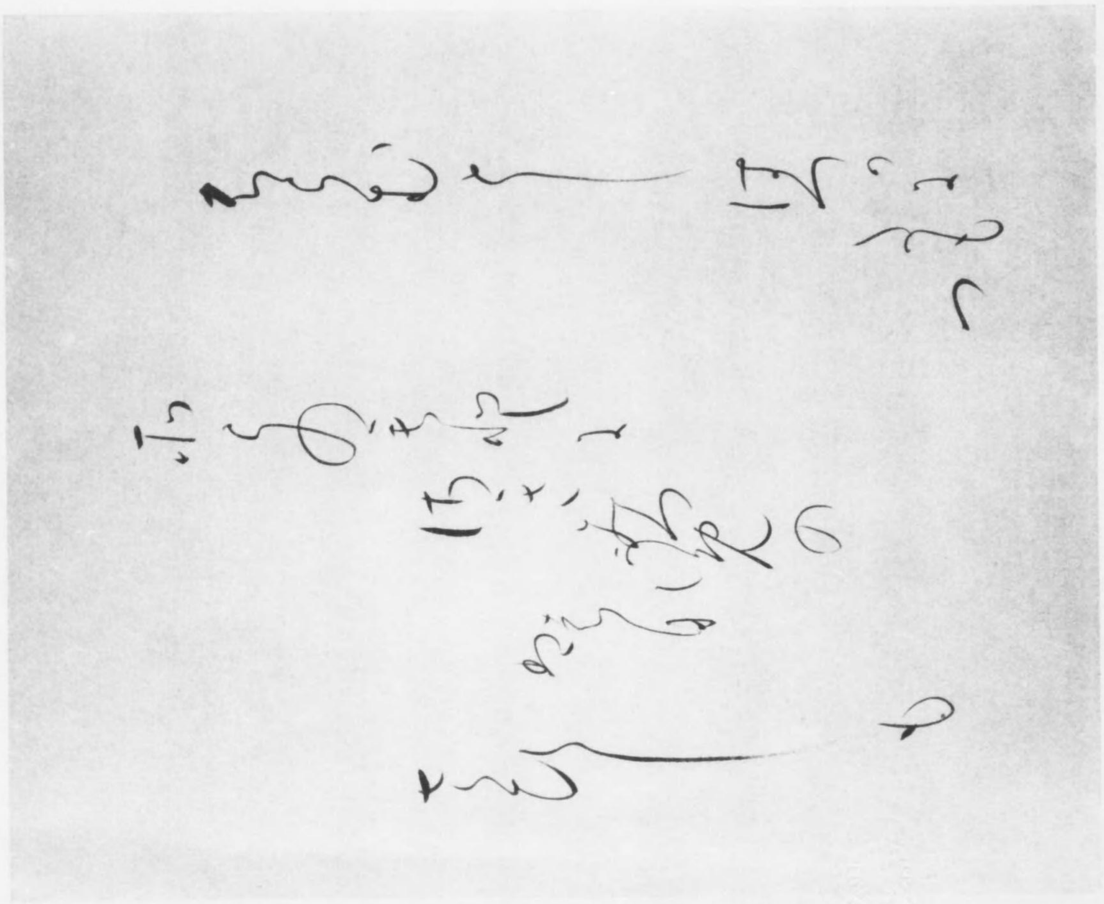
八　ほたほたと枝の尖よりこぼれ落つ濕滿てる春の夜の雪

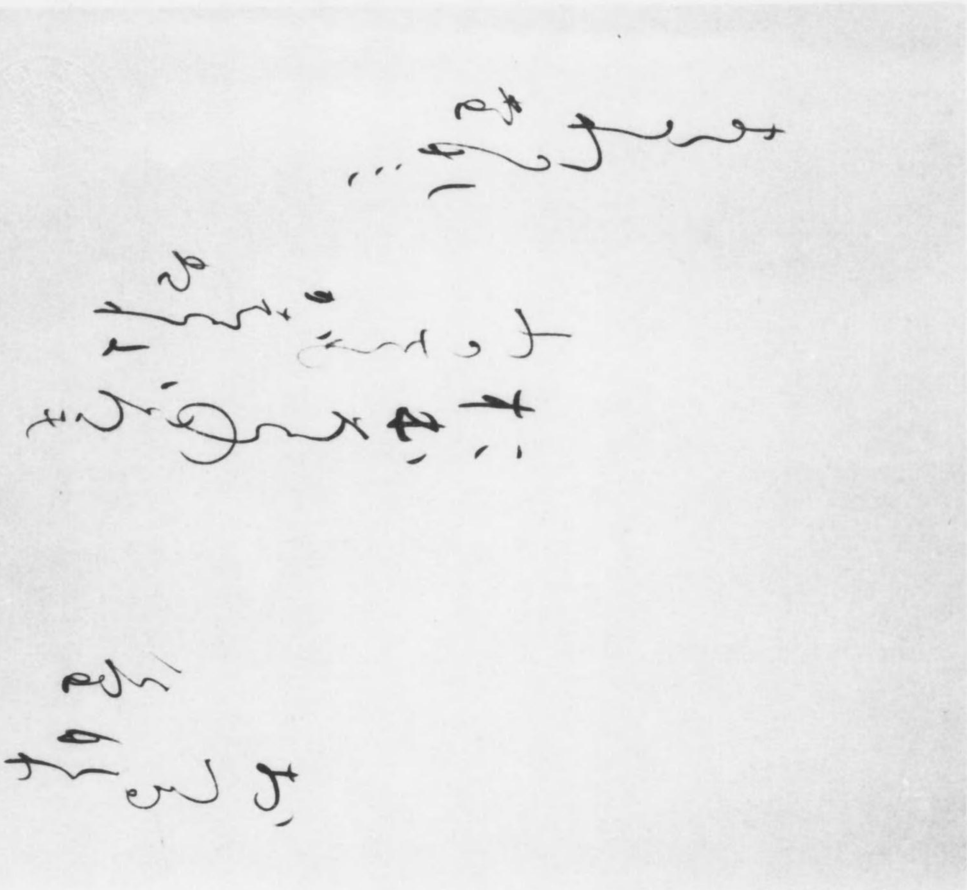
九　山の鳥又も啼くよと呼ぶ聲に輕くはねたる麻蚊帳の裾

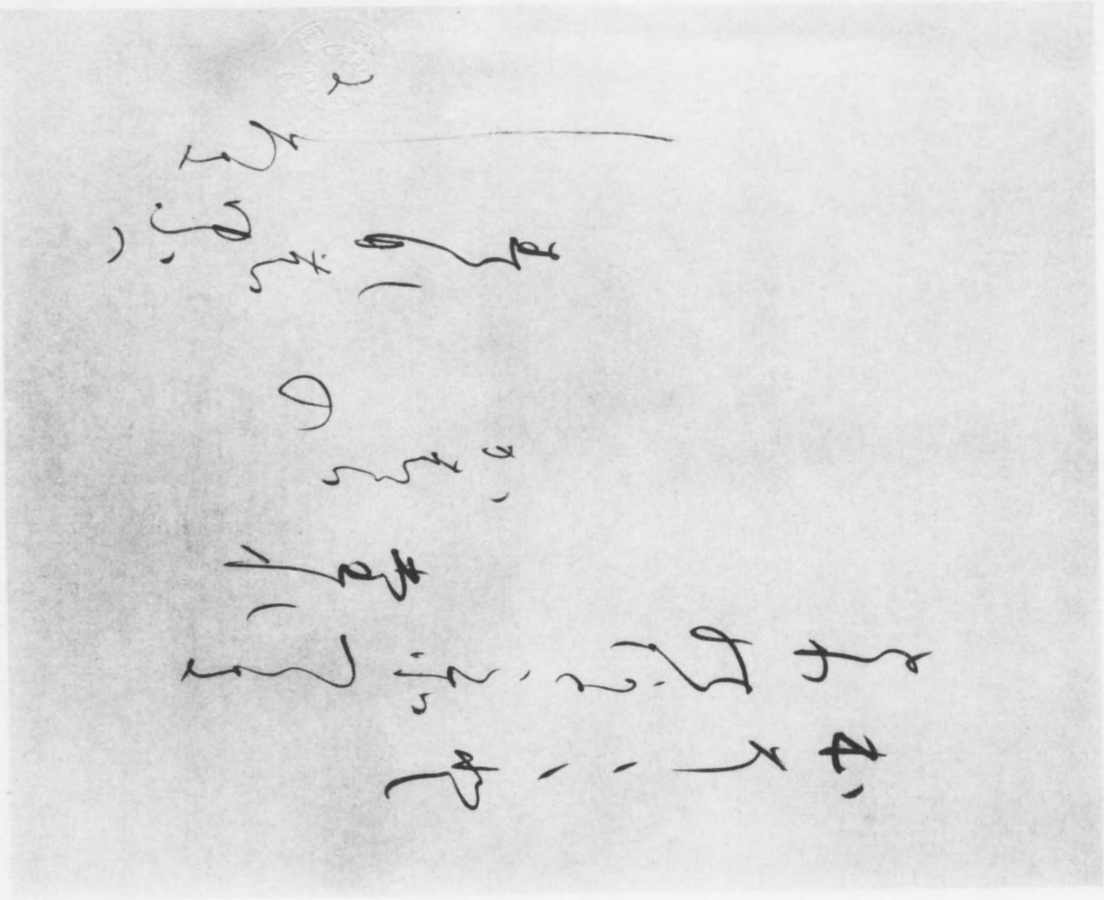
十　影暗き山の上にして月は今澄まむ限を澄まむとすなり

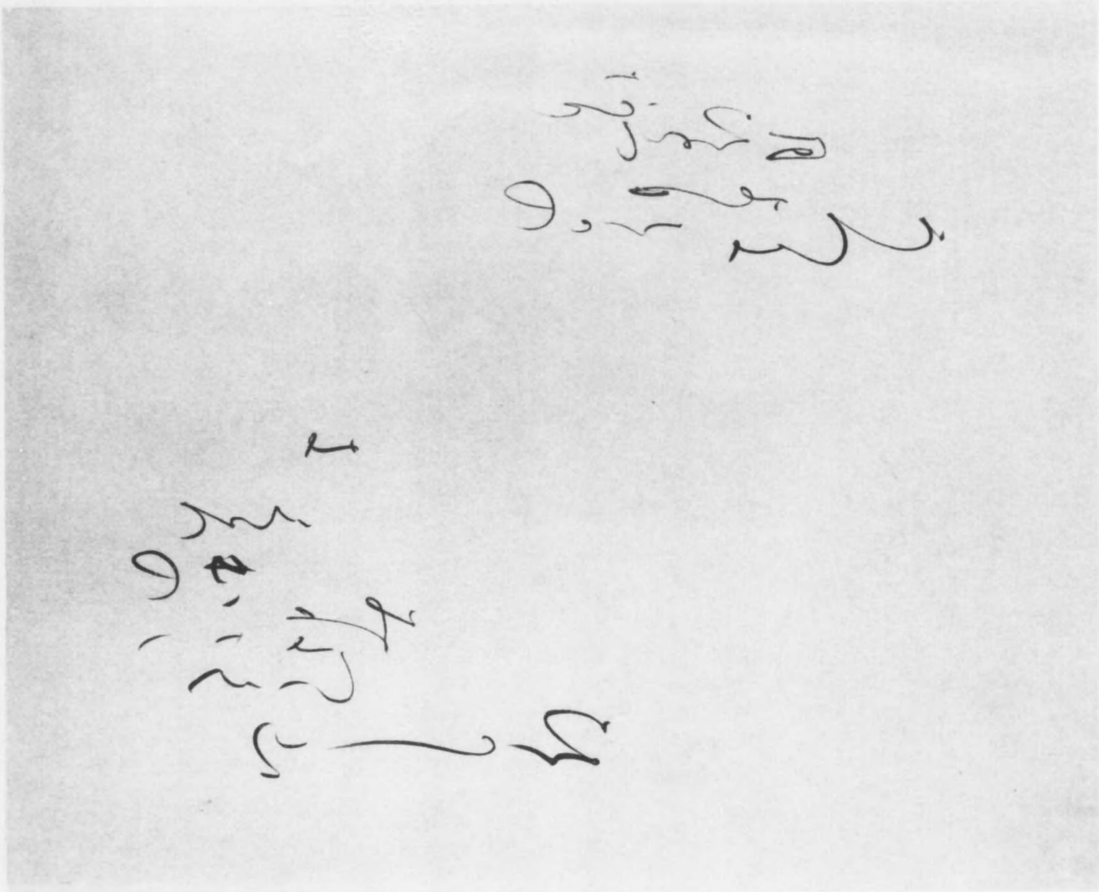


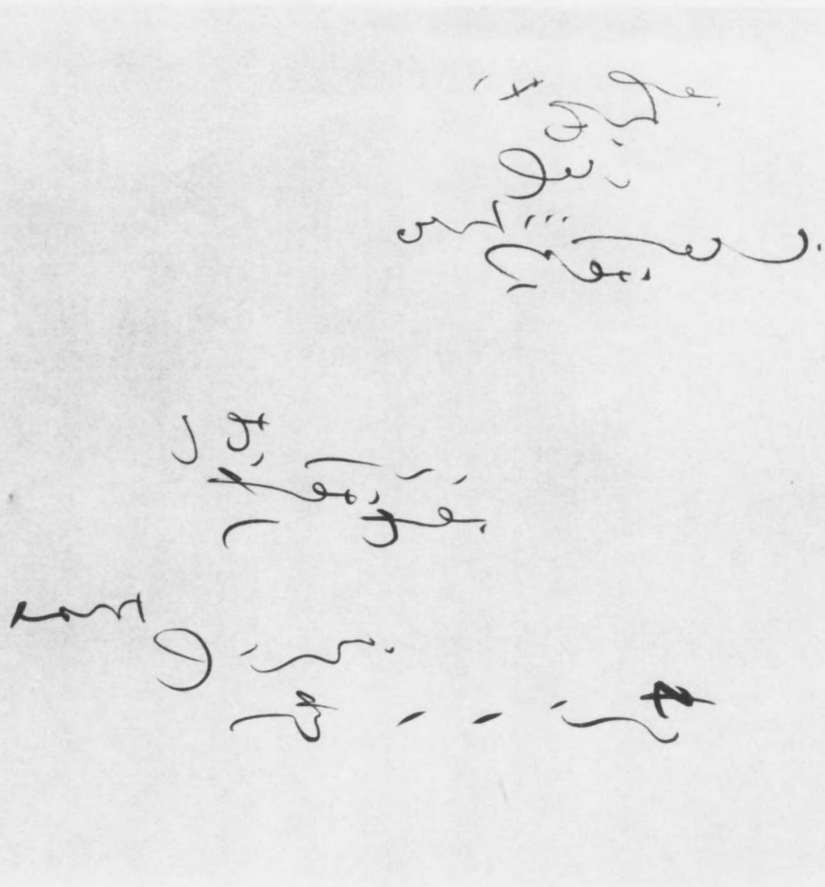


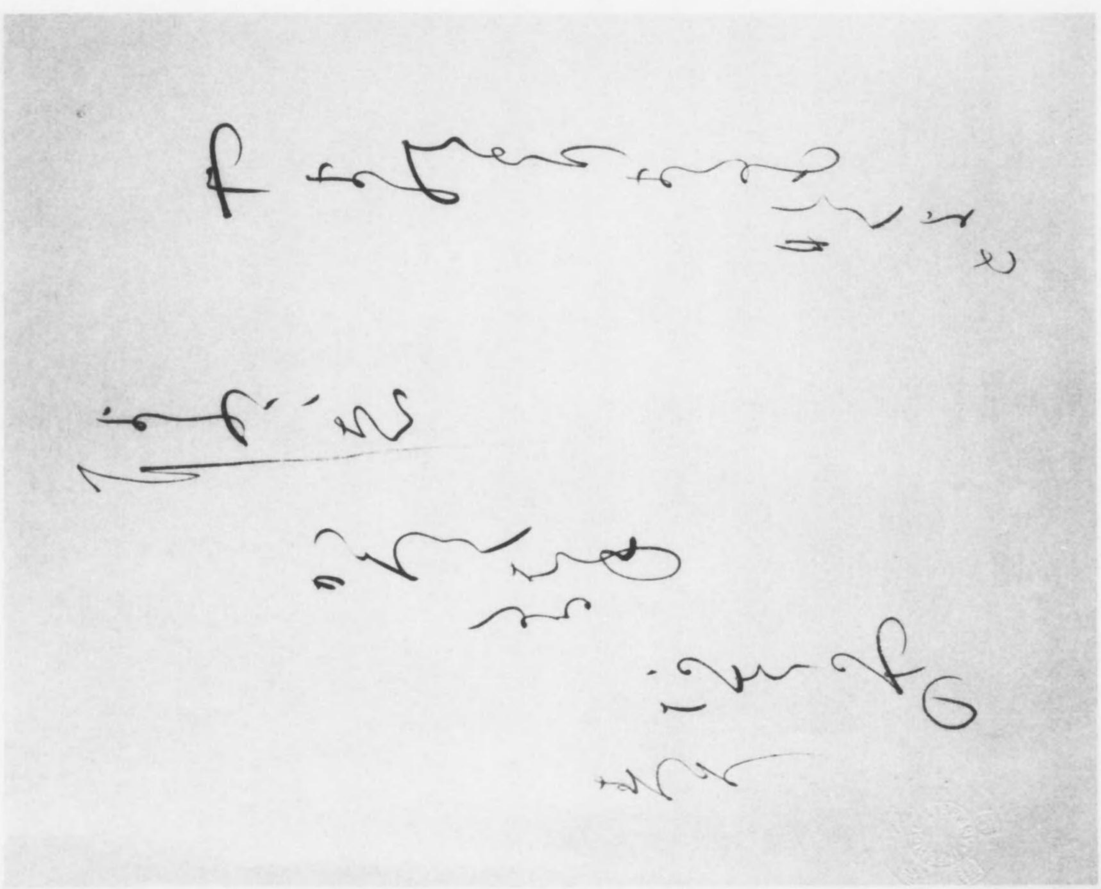


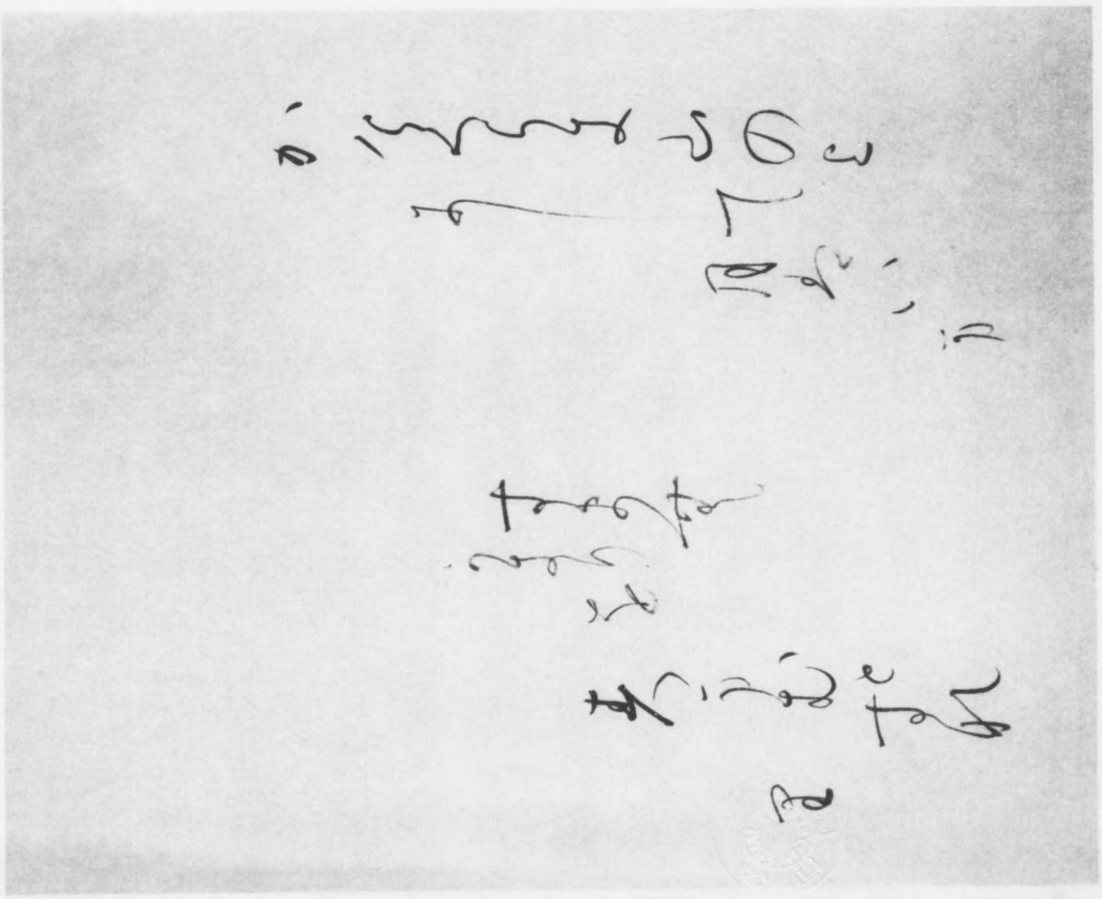












昭和十一年四月三日印刷
昭和十一年四月八日發行

著作權所有
東京市麻布區宮村町三十三番地
著者　松田常憲

東京市麻布區宮村町三十三番地
印刷所　株式會社　秀英舍

東京市麻布區宮村町三十三番地
發行所　株式會社　秀英舍出版部

303
26

303
26

終